

# 推薦の言葉

情報は変化する。これには賛否両論ある。薬を例に考えてみよう。賛成の立場から言えば、その一つに関係性の変化がある。例えば、ある病気の適応を有する薬にAだけがあった場合とAだけではなく類似薬Bもあった場合では状況が異なってくる。そう“使い分け”という行為が生じてくるわけだ。

また、薬がAから類似薬Bへと変更になったとき、なぜその変更が行われたのか、を患者に伝える必要がある。納得しないと患者は薬を飲まないかもしれないし、不適切な使用へとつながる場合もあるからだ。

次に、反対の立場から。いかに医学・薬学が進歩しようと、薬そのものが有する薬理作用は変わらない。また、薬固有のパラメータも不変である。この不変的なものである薬物動態的なデータを使い慣れていれば柔軟な服薬指導が可能になる。

この両面を踏まえた効果的な勉強法がある。それは、薬の特徴を一言で言い表す、という訓練だ。この方法を体現したものが、それが本書である。類似薬の違いを一言で表現できれば、それは患者の理解を容易にするだろう。そして、その表現の根拠を薬理作用や薬物動態的なデータに求めるわけだ。

本書を参考にすれば、医師の処方意図が透けて見え、服薬指導に柔軟性が生まれるようになりきつとなる。そして、本書を踏み台にもう一つ上のプラトーンに達したいならば、本書を参考に自分で本書の続きを作ってみることだ。類似薬を比較し、差異に注目するのだ。

“比較対照することによって、考えを進めやすくなる。違い、差異を明らかにする作業によって、ものごとの本質をつかみやすくなるからだ。

「意味は差異から生まれる」とは言語学者ソシュールの考え方だ。あるものとあるものの違いが、意味を生み出すという考え方である。つまり、「ずれ」や「違い」から意味が立ち現れるのだ。

「比較」は、思考の王道である。”

(齋藤 孝『アイデアを10倍生む考える力』、だいわ文庫、p.191)

まずは本書を手にして、比較の仕方を学ぼう。薬理や動態をどう表現し、どう用いているのか。薬理・動態といった“薬学の王道”を、比較という“思考の王道”で学んでいくのだ。これが楽しくないわけがない。本書で学び、本書を踏み台にし、薬理・動態の知識が処方提案や服薬指導に滲み出る。そんな薬剤師が増えていくことを期待して、本書の推薦の言葉としたい。

2017年9月

阪神調剤ホールディンググループ 有限会社 アップル薬局  
熊本大学薬学部 臨床教授  
山本 雄一郎